

校内スモールステップルーム（校内SSR）について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校2年生であり、小学校高学年から不登校であった。不登校の要因は、通常学級での生活等が本人の生活や学習のペースが合わず、疲労を感じてしまうことである。保護者と連携し、校内スモールステップルーム（以下、校内SSRという）で当該生徒のペースに合わせて支援に当たっている。

具体的な取組

○全教職員の共通理解

養護教諭を主担当とし、年度当初に全教職員で「校内SSRガイドライン」を確認し、校内SSRの①位置付け、②対象生徒、③利用や申請の仕方、④校内別室指導支援員との連携、⑤保護者との連絡方法等について共通理解を図った。

○個別最適化を図った学習支援

当該生徒が希望した時間や内容で学習支援を進めている。

希望した教科を自習させるだけでなく、校内別室指導支援員が5教科の学習及び実技教科等の作品制作を支援している。



○校内SSRの組織的な利用

校内別室指導支援員がいじめ不登校対策委員会に参加し、管理職及び関係教職員と生徒情報を共有している。

当該生徒は、特別支援教育が必要であるため、校内別室指導支援員が特別支援校内委員会にも参加し、支援方法の検討を継続して行っている。

○不登校の未然防止

当該生徒以外にも一時的に教室や授業に入れなくなった生徒をSSRにつなぎ、校内別室指導支援員が支援をしている。

また、不登校傾向にある生徒の授業に校内別室指導支援員が入り、学級全体の支援をしながら当該生徒との関係づくりを図っている。

成果

全教職員で共通理解を図ったことで、校内別室指導支援員との組織的な連携が図られ、生徒が安定して登校できる支援につながっている。

また、新たな不登校生徒の出現率を抑え、不登校を未然に防止することができている。

課題

校内SSRの利用生徒が増加した場合でも、現在のような充実した支援を継続するための仕組みを作る必要がある。

校内スモールステップルームの活用について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校 1 年生であり、小学校の時から不登校状態が継続している。自閉症スペクトラムや不安障害の診断を受け、投薬により徐々に軽快したが、小学校 5 年生途中から自宅から出ることができていなかったため、中学校入学時から校内スモールステップルーム（以下、校内 SSR という）で支援を開始した。

具体的な取組

○校内での情報共有

校長、学年主任、養護教諭、特別支援コーディネーター、スクールカウンセラー（SC）、スクールソーシャルワーカー（SSW）による特別支援部会を、毎週開催し、情報の共有や、対応方針を協議している。協議内容を全教員に周知し、共通した対応ができるようにしている。

○個別の日誌

1 時間ごとの学習の記録を記入するファイルを作成し、担任がコメントを書くなどしてやりとりをしている。授業に参加できた場合は赤丸、授業見学は青丸を付け、保護者にも面談の際に、校内 SSR 利用時の取組状況を説明している。

○SC との連携や他校の取組の共有

専門的な知識がある SC とのカウンセリングにつなげることで、生徒の心理的な不安の軽減を図ることができている。また、他校の別室支援の取組や教員と校内別室指導支援員の連携の好事例を共有し、自校での取組の参考にしている。

○校内 SSR のレイアウト

周囲の音に敏感な生徒や他者の目線が気になる生徒がいるため、パーティションを配置している。落ち着いた環境で学習できるように工夫をしている。



成果

校内 SSR での支援によって、安心して登校できるようになり、徐々に自信を取り戻したことで、学校行事や一部の教科ではあるが教室での授業に参加できるようになった。

課題

特性がある生徒の個別対応に課題がある。学級担任等と連携し学校全体で共通理解を図る必要がある。

校内別室を活用した不登校生徒の支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校 2 年生であり、中学校 1 年生の後半から不登校ぎみになった。当該生徒は「大勢の中に入るのが怖い。」と言っており、他人の目を必要以上に気にして登校しても教室に入ることができなかつたため、校内別室への通室につなげ、教室復帰を目標にした支援を行った。

具体的な取組

校内別室指導支援員と学校支援指導員が連携し、教科書や副教材、教科で使っているプリント、タブレット端末を活用した学習支援を行っている。

必要に応じて教員が別室で指導することもある。また、生徒の希望に応じて、参加できる授業については教室で受けられるように促している。

校内別室指導支援員は、生徒が登校したら、職員室の学年の掲示板に名前のマグネットを貼り、登校状況を共有している。

また、「活動日誌」にその日の学習内容や留意事項を記入し、担任と情報共有することで、当該生徒の支援を継続的に実施することができている。

校内別室指導支援員から日常の様子や気になることを伝えたくて、スクールカウンセラーとの面談を週 1 回実施している。面談後の情報は担任や教員にも共有している。

また、必要に応じて、学校外の不登校の支援機関など、外部機関にもつなげている。

校内別室指導支援員と担任が連携し、自己 PR カードの作成や作文の書き方の助言、面接練習など、卒業後の進路決定に向けた支援を行っている。



成果

学校に居場所ができたことで、登校日数や学校で過ごす時間が増加した。また、校内別室指導支援員と教員やスクールカウンセラーが連携して支援することで、授業への参加や学習に前向きに取り組む意欲が向上している。

課題

集団行動やコミュニケーションを図ることに課題のある生徒が多い。個別の支援や関係諸機関との連携が必要である。

校内別室における不登校支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校 2 年生であり、中学校 1 年生の 1 月頃から不登校が続いていた。不登校の要因は友人とのトラブルであり、トラブルの解消後も欠席が続いた。2 年生の 4 月からは通常どおり登校できていたが、親子関係の悩みを理由に 6 月下旬から再び登校を渋るようになり不登校となったため、校内別室での支援につながった。

具体的な取組

曜日によって対応する校内別室指導支援員が異なるため、毎朝不登校対策担当教員と前日の生徒の様子やその日の課題等の情報共有を行い、その日の別室での過ごし方について共通認識を図っている。



少しずつではあるが、教室へ入ることができているため、教室で過ごすことを基本とし、教科やその日の本人の状況で別室を利用し、心を落ち着かせられるようにしている。

また、様々な教員が別室に出入りし、なるべく多くの人と関わることができるようにしている。

スクールカウンセラーと連携し、本人とともに、母親のカウンセリングも行い、親子の気持ちの安定を図った。カウンセリングの内容は、教育相談部会で共有している。

また、本人から医療機関の受診希望があったため、区の支援機関を通して、適切な医療につないだ。

学習の遅れから本人の自己肯定感が低下しないよう、別室で課題に取り組み、なるべく教室の進度に合わせて学習を進めている。

分からない問題は、校内別室指導支援員が適宜支援するとともに、教員が空き時間等に指導に当たっている。

成果

本人の気持ちに寄り添い、SC や医療等と連携しながら本人のペースに合わせて教室復帰を促したため、9 月以降は学活、総合などの一部の教科に参加することができた。

課題

別室利用の生徒同士の関わりが教室復帰の妨げになる場合があり、別室利用のルールを再確認する必要がある。

AS ルーム(ステップルーム)の活用について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校2年生であり、他区の小学校を卒業後、墨田区に転入した。登校渋りの主な要因は同級生との友人関係への不安だった。教室に入ることに不安感が強いいため、AS ルーム(ステップルーム)に通室し、校内別室指導支援員と教員で連携して支援に当たっている。

具体的な取組

教員や校内別室指導支援員と信頼関係を構築しながら、学習等の活動に取り組んでいる。

また、AS ルームを利用する生徒同士で関わりをもてるように配慮し、他者との関わりに対する不安軽減やコミュニケーション能力の向上を図り、登校不安の解消につなげている。

AS ルーム内では給食を食べることも可能にしている。生活習慣を整えるとともに、給食を教室まで自分で取りに行くことも教室復帰のきっかけにしている。



通室時に担任から手紙や授業プリントを受け取り、教員や校内別室指導支援員とその日の活動計画を立てている。

各教科の教員は、空き時間等に AS ルームを訪ね、当該生徒が取り組んだ課題をチェックしている。

また、状況に応じて学級で行っている授業にオンラインで参加できるように環境を整備している。

通室時に、美術や家庭科などの実技教科の作品づくりに取り組めるようにしている。

作品の仕上げを美術室や被服室で行うなど、他の生徒が利用する教室で作業することによって、教室復帰に向けて自信をつけられるようにしている。

完成した作品は文化祭等で展示し、学習の成果が見えるようにしている。

成果

生徒にとって「ほっとできる場所」や「自信をつけられる場所」になり、登校回数や学習時間が増えた。また、登校のリズムが整うことで、基本的な生活習慣が整い、学習意欲の向上にもつながった。

課題

AS ルーム登校の習慣が身に付いた生徒に対して、教室復帰に向けた支援計画の作成や学年教員や担任と、各家庭で密な情報共有など連携を強化する必要がある。

校内スモールステップルーム（校内別室）の活用について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、小学校から不登校の状況が続き、学習に遅れや苦手意識がある。校内スモールステップルーム（以下、校内 SSR という）に登校しながら、自分のペースで学習に取り組むとともに、友人や教員との交流、スクールカウンセラー（以下、SC という）との面談で、少しずつ自分を表現することに自信がもてるようになってきている。

具体的な取組

○「学校に行きたい」気持ちを大切に
自分のペースで出来ることを校内別室指導支援員と一緒に考えながら、無理のない範囲で登校することで、「学校に行きたい」という気持ちを持ち続けられるようにサポートをしている。



○自分の得意を知る

「絵を描くことが好き」、「鉄道に詳しい」など、SC や校内別室指導支援員との会話から、自分の得意に気付かせ育むことを大切にしている。



○自分にあった目標を決める

「教室に行ってみんなと一緒に授業を受けたい」、「高校に行きたい」など、一人ひとりの目標を大切にしつつ、校内別室指導支援員や SC との面談を通して、小さな目標を設定し、少しずつ目標を達成することで自信を付けられるように支援している。

○がんばりたい気持ちを支える

教室授業を受けたいが、不安な気持ちが強くなった場合に備え、気持ちを落ち着かせられる居場を校内 SSR に確保するなどの対応を行っている。



成果

支援の結果、当該生徒は校内 SSR に安心して登校することができるようになった。登校状況の改善が保護者の心の安定にもつながったことで、一層生徒の心が安定し、前向きな登校につながっている。

課題

不登校の原因が多岐にわたり、個別対応が必要な生徒が多い。SC との連携を一層強化する必要がある。

校内 SSR を活用した不登校解消の取組について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校 3 年生であり、中学校 2 年生の時から不登校状態が継続している。不登校の要因は、他者との関わりへの不安である。学校外の適応指導教室へ通うことはできていたが、学校への登校ができていなかったため、教室復帰に向けて校内別室での支援を開始した。

具体的な取組

各学年の不登校対策教員、スクールカウンセラー、養護教諭、生活指導主任の学校と家庭の支援員、副校長が構成員となった不登校対策委員会を毎週開催している。

不登校対策委員会では不登校対策の改善のために、当該生徒への支援の成果を検証している。

不登校対策委員会で組織的に検討した今後の対策の方針やアセスメントについて、学級担任をはじめとした学年教員、校内別室指導支援員に共有し、学校全体で共通した対応ができるようにしている。

また、校内 SSR での過ごし方についても併せて共有している。

校内スモールステップルーム（校内 SSR）を活用し、校内別室指導支援員と教員が連携して生徒の教室復帰に向けた個別支援を行っている。



校内 SSR へ登校の際に、別室学習カードにその日の学習に関する個人目標を記入し、登校状態を可視化している。

また、下校前に校内別室指導支援員と当該生徒で 1 日の振り返りを行う際に、励ましの言葉を掛けながら登校意欲を喚起している。

成果

支援の結果、当該生徒は 5 月以降継続的に登校することができるようになった。7 月下旬には、自ら希望して在籍学級へ行き、配布物の受け取りや一部の授業の見学や参加ができるようになった。

課題

年々、小学校から不登校傾向が見られる生徒が増えてきている。小学校との連携を強化する必要がある。

校内スモールステップルーム（SSR）の活用について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、小学生の時から不登校状態が継続している。令和5年5月のSSR開室以来、毎日決まった時間に登校し、SSRで自習に取り組んでいる。校内別室指導支援員が中心となり、他のSSRに通室している生徒ともコミュニケーションを図る機会を設けるなど、登校意欲の向上に向けて支援を行っている。

具体的な取組

不登校対策担当教員を中心に、アセスメントに重点を置き、個別のケース会議を定期的実施している。ケース会議では、三者面談の内容や巡回相談心理士による観察等から情報を収集・分析し、チームで支援の方向性を確認するとともに、校内別室指導支援員にも情報共有している。

チーム支援のための校内委員会を1～2週間に1度開催し、支援シートを基に生徒の状況や変化を共有し、当該生徒との関わり方において、不登校対策担当教員や学年担当教諭、養護教諭、校内別室指導支援員等が共通した対応ができるよう連携を図っている。

各学年の教科担当が必要に応じて、授業で使用したワークシートや課題等を当該生徒に提供している。

また、教科担当と校内別室指導支援員が連携し、当該生徒の学習の取組状況を確認しながら支援に当たっている。



校内別室指導支援員は、毎日日誌を記入し、SSR担当教員及び管理職に出席状況や当該生徒の活動状況を報告している。担任は、校内別室指導支援員と当該生徒の状況を共有し、学期ごとに、当該生徒・保護者と面談を実施し、成果を踏まえて今後の中期・長期の目標について確認している。

成果

チーム支援を継続した結果、当該生徒は安定して別室登校ができるようになった。別室登校の際には、個別の出席簿を記入し、登校状態を視覚化することで、登校意欲が増大し、毎日登校できるようになった。

課題

集団への適応やコミュニケーションに課題があるため、ソーシャルスキルトレーニングや感情のコントロールに関する支援が必要である。

校内スモールステップルーム（SSR）の活用について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校2年生であり、中学校1年生の前半より教室に入れず不登校状態となった。不登校の要因として、小学校と中学校との環境の変化、学習に付いていけない等が理由として挙げられた。

校内 SSR での支援により登校への不安解消を図っている。

具体的な取組

学校全体の取組として、自分の学級の授業をオンラインでつなぐことで、通室している生徒が常に自分の学級の様子を見ることができるようになっている。



生徒のタブレット端末を SSR でも活用し、通室している生徒が多い場合でも、常に個に応じた学習につながるよう、環境を整備している。



本校の不登校担当教員と校内別室指導支援員、スクールカウンセラー、養護教諭等で、日報などを通して、通室している生徒の変化や様子を情報共有している。気になることなどあればすぐに学級担任等に情報提供することで、学校全体の組織的な対応につなげている。

校内別室指導支援員による指導が可能な教科については、適宜参考書用を使用



して指導するなど、SSR を学習する場として前向きに活用している。

成果

学級の教室には入ることができないが SSR に登校することで、学校とのつながりを保っている。それにより学級担任等と話す機会も増え、生徒と教員の信頼関係づくりにつながっている。

課題

SSR は居心地がよいと感じており、長期間利用することが多い。最終的には教室に戻れるよう、全教職員による声掛けを継続していく必要がある。

校内適応指導教室について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、本校に転入してきた中学3年生である。対人関係や学習面での不安感を抱えており、前籍校においても欠席が多く、なかなか登校できない状況があった。本校転入後、徐々に欠席日数が増えてきたことから、校内別室である校内スモールステップルーム（以下、校内SSRという）で支援を行っている。

具体的な取組

○登校へのハードルを下げる

生徒、担任、校内別室指導支援員と相談して決めた時間に登校できるように設定している。下校時間も生徒一人一人と相談して定め、生徒それぞれの状況に合わせて登下校できるよう支援している。

○個に応じた指導

一人一人の生徒が、自分で学びたい教科や取り組みたい事項を選び、継続的に取り組むことができるように働きかけている。当該生徒は、進学に向けて学習に取り組み、校内別室指導支援員から助言を受けたり、学年教員から指導を受けたりする場面も多くなっている。

○他の生徒との交流

校内別室指導支援員との信頼関係が構築され、登校が安定している。校内SSRに通室する他の生徒との交流を深め、その中で人間関係の構築の仕方を学び、卒業後の進路に向けて前向きに考えて取り組んでいる。

○スクールカウンセラーとの面談

適応指導教室に通う生徒は、定期的にスクールカウンセラーと面談を行い、生徒の
アセスメントや今後の支援の在り方について教職員で共通理解を図る機会にしている。



成果

不登校状態にある生徒が、安定して登校ができるようになり、生活のリズムを整えることができるようになった。出席日数が増え、卒業後の進路選択に前向きに取り組めるようになった。

課題

一人一台端末を活用し、授業にも参加できる日を増やしていき、生徒の学びを今まで以上に保障していく。